

私のモチーフ

バリ礼讃

会員 中井悦子

七時間程の飛行の後、バリに着いたのは夜、機中から見た島は暗く、空港やリゾートホテルらしい灯がつましく光っていました。素朴なングラ・ライ空港に入ると、花の甘い薫と何とも不思議なお香の混じりあった、熱い湿気を帯びた空気に包まれました。その瞬間、どうやら私は魔法にかけられてしまったよう

す。

この小さな島では、人も植物も動物も、すべてのものが生き生きと鮮かです。その上独特の芸能や祭礼に満ちた宝箱のようでした。私はまるで恋に落ちたようにすっかり心を奪われてしまい、以後毎年バリを訪れることになったのです。



▲ プラウ・バリ

プラウ・バリ

(二〇〇三年)

それまで制作のテーマにバレリーナを描いていたのですが、バリを描いてみたいという気持ちは高まるばかりです。そこでベンチや小物を買って揃えてバリコナーを作り、エキゾチックなモデルさんにバリ人の気分になってもらうて描きました。「プラウ・バリ」とは「バリ島」という意味で、私の強い憧れが溢れているなつかしい作品です。

神話への誘い

(二〇〇七年)

大らかな海辺も好きですが、山の村ウブドウにはとりわけ魅了されています。ここは「絵画の村」と呼ばれ画家の多いところ。バリ絵画には幾つかの様式があり、それぞれ技法も異なりますが、ヒンズー教の影響から神話を描いたものが多く見られます。神話は舞踊や音楽、演劇にも取り入れられ、日常の生活にもごく自然に溶け込んでいます。この作品では聖鳥ガルーダが舞い降りて、神話の世界へと誘っているところ。こ



▲ 神話への誘い

生命の樹

(二〇一〇年)

祭礼の夜の楽しみの一つに影絵劇があります。ガムランの演奏と伴に、夜の暗にほの白く浮かぶ小さなスクリーンに現れる影絵劇を見ていると、まさに神話の世界にワープしてしまいます。この中で重要なのが「カヨン」と呼ばれる大きな扇のようなもので、生命の樹を表し、宇宙を象徴するとも言われています。その広大な宇宙の中で、綿々と続く生命の流れを描けたらと思います。

天の恵みは地に満ちて

(二〇一〇年)

いつもどこかで行われている祭礼、芸能や、おびただしい工芸、芸術作品は、すべて色とりどりの花や果物の供物とともに神に捧げられるものです。人々は自然の恵み、日々の営みに感謝して、祝祭を行います。確かにバリは、二、三毛作の米やさまざまな果物や水など豊かです。

けれど日本の私達のまわりも、見わたせば多くの恵みに満ちています。いつの間にかそれが見えなくなり、感謝の心を



▲ 生命の樹



▲ 天の恵みは地に満ちて

忘れてしまっていることに気付かされま
す。そんな思いを込めた作品です。

こうしてバリを題材にした幾つかの作
品を振り返ってみると、この島に魅せられ
た理由が浮かび上がってきます。テーマ
とした要素はかつて日本にも存在してい
て、今は失ってしまったものようです。
小さな南の島で、この失ってしまったも
のを再び見つけ、あらゆる生物とともに
私達人間も、自然や宇宙の計り知れない
大きな力と神秘に包まれて存在している
ことを実感します。

「芸術は祈りのようであらねばと思ひ

ます——」これはバリの恩人と言われた
ドイツ人画家ウオルター・シュビスの
言葉です。そのように制作していけたら
と願って、キャンバスに向かう日々です。